



Title	二つのブレジネフ党史
Author(s)	木村, 汎; Kimura, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 17, 57-69
Issue Date	1973
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5028
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112962.pdf



二つのブレジネフ党史*

木 村 汎

まえがき

1971年秋、『ソ連邦共産党史（追補第四版）』—以下、『第四版』と略す—が刊行された。これは、1969年発行の『ソ連邦共産党史（追補第三版）』—以下、『第三版』と略す—の改訂版である。同一（ブレジネフ）政権下の僅か2年の間隔で—フルシチョフ期の2つの党史、すなわち『ソ連邦共産党史』（以下、『第一版』と略す）と『ソ連邦共産党史（追補第二版）』（以下、『第二版』と略す）ですら（？）、3年の間隔をおいて改訂された！—改訂版がだされる必然的理由は乏しいように思われる。しかも、変更された部分は、一見したところ、なんら劇的ドラマチックなものでないように見える。両者は、少くとも執筆陣の顔ぶれ（11名）、章数（19章）、ページ数（736ページ）などのいわば形式的側面において、さながら意図したかのごとく全く同一である。では、改訂版がなぜ出されたのだろうか？

思うに、改訂版発行の最大の理由ないし少くとも直接のきっかけとして、「第24回党大会の開催」を指摘することに、何人も異論あるまい。フルシチョフ期においても、『第一版』（1959）と『第二版』（1962）の間には、第22回党大会（1961）の開催という事情があった。同様に、ブレジネフ期のばあいも、『第三版』（1969）と『第四版』（1971・秋）との間に、第24回党大会（1971・春）が介在している。したがって、第24回党大会の記録を追加し、党史をよりアップ・トゥ・デートなものにしたいという欲求が生じて当然なのである。事実、また、『第四版』が第24回党大会に与えた意義と比重の大きさは、疑問の余地がない。たとえば、既述のごとく、全体の章数において、『第三版』と同一（19章）であるにもかかわらず、そのうちの1章全体が、第24回党大会の記述に割かれている。『第四版』刊行にあたって特別に執筆された、1971年11月16日付『プラウダ』紙上の「新版『ソ連邦共産党史』」と題する記事も、このことを卒直に確認して、つぎのように述べている。

「第四版教科書のために、新しい第19章が執筆されたが、これは、第24回ソ連邦共産党大会に捧げ

* 本稿は、同じ筆者の前稿「党史と政権—歴史的・比較的研究—」（『スラヴ研究』、No.16、1972年3月）、pp. 1—55の補論ないし続編である。前稿は、スターリン期の『全連邦共産党（ポリシエビキ）小史』（1938）、フルシチョフ期の『ソ連邦共産党史』（1959）ならびに『ソ連邦共産党史（第二版）』（1962）、ブレジネフ期の『ソ連邦共産党史（第三版）』（1969）、計4つの党史の歴史的沿革を述べ、重要ポイントの比較対照をおこなったものであった。ところが、前稿発表後、第5番目の党史『ソ連邦共産党史（第四版）』（1971）が刊行され、それを追加紹介する作業の必要性が生じた。その作業をおこなうにあたり、本稿は、この最新版を、その前身たるすべて（4つ）の党史と比べ—それは、いたずらに煩雑であるばかりでなく、これとさして変らない直接の前身たる『ソ連邦共産党史』（1969）にかんし、前稿で既になされている—のではなく、第4番目の党史『ソ連邦共産党史』（1969）とのみ比較するという方法を採用した。ともにブレジネフ期の党史としての両者の異同を検討することは、ブレジネフ政権の連続性と非連続性を探る貴重な手掛りを提供すると考えられたからである。いずれにせよ、両稿の併読が希望される。

られている。この中において、大会の記録が、詳細に（обстоятельно）記述されている。すなわち、……」¹⁾（強調点—木村）。

ところで、フルシチョフ期における『第二版』刊行の意義は、『第一版』に、第22回党大会の記録の付加のみにとどまらなかった。すなわち、それは、別稿で詳述したごとく、『第一版』刊行後3年間のソ連における政治＝イデオロギー的 climate の変化、とくにフルシチョフの権力ならびに路線の確立・強化を反映させる点にあった。²⁾ それでは、これと同様のことが、今度のブレジネフ期における『第四版』についても言いうるだろうか？ 結論を先に述べるならば、このフルシチョフ期の『第二版』ほど顕著とはいえないにせよ、それでもやはり、ブレジネフ期『第四版』も同『第三版』に比べ、ブレジネフの権力ならびに路線の確立・強化をたしかに反映する党史となっている。つまり、『第四版』における「第24回党大会」以外の、一見ほとんど変りないように見える部分も、『第三版』と注意深く比較対照つき合わせてみると、ニュアンスの差異や強調点の移動が少なからず見出されるのである。それらについて具体的にみることを、以下の本稿の課題としたい。

I 指導者の評価

A 「スターリン」の名誉回復

『第四版』は、ごくわずかとはいえ、『第三版』でおこなわれた「スターリン」の〈名誉回復〉作業を、もう一歩進めたと判断される。その根拠は、つぎの三点である。

(1) スターリンの粛清にたいする責任が、わずかながら、軽減されようとしている。すなわち、1930年代におけるスターリン個人の粛清にたいする責任は、すでに『第三版』中において一部分、彼の手先として「党と人民にとくに大きな害を及ぼした」³⁾ エジョフとベリアに転嫁されうる旨暗示されていたが、『第四版』では、エジョフとベリアにたいする責任転嫁のケースが、もう1か所増加しているのである。つまり、下記のごとく、『第四版』では、『第三版』の記述に、「エジョフとベリアの指示によって」の一句が、ことさら明確に付加された。（□は木村、以下同じ）。

『ブレジネフ第三版』（1969）	『ブレジネフ第四版』（1971）
内務人民委員部諸機関によって勝手におこなわれた中央委員と同候補にたいする告発は、中央委総会では審査されなかった。 ⁴⁾	エジョフとベリアの指示によって 内務人民委員部諸機関によって勝手におこなわれた中央委員と同候補にたいする告発は、中央委総会では審査されなかった。 ⁵⁾

1) *Правда*. (16 ноября, 1971), стр. 2.

2) 木村汎, 前掲, pp. 18—20参照。

3) *История Коммунистической партии Советского Союза (издание третье, дополненное)*. (Москва: Политиздат, 1969)—以下, *История КПСС (1969)* と略す—, стр.452. 早川徹訳, 『ソヴェト連邦共産党史』(東京: 読売新聞社, 1971), 下巻—以下, 早川訳と略す—, p. 649.

4) *Там же*. 同上。

5) *История Коммунистической партии Советского Союза (Издание четвертое, дополненное)*. (Москва: Политиздат, 1971)—以下, *История КПСС (1971)* と略す—, стр.452.

二つのブレジネフ党史

(2) 『第四版』では、所謂「スターリン批判」にかんし、二か所削除部分がある。① まず『第三版』では、スターリン批判が、第20回党大会（1956）で「重要な位置（важное место）を占めた」と書かれていたのが、『第四版』では削除されている。（削除部分は木村、以下同じ）。

『ブレジネフ第三版』（1969）	『ブレジネフ第四版』（1971）
第20回党大会 <u>の仕事のなかで重要な位置を占めたの</u> は、スターリンの個人崇拜と、その結果の克服についての問題だった。 ⁶⁾	第20回党大会 <u>(削除)</u> は、スターリンの個人崇拜と、その結果の克服についての問題を審議した。 ⁷⁾

② また、ソ連共産党によるスターリン批判の対象が、『第三版』では「スターリン個人崇拜とそれが生み出した誤りと歪曲」（強調点—木村）だったのが、『第四版』では「それが生み出した誤りと歪曲」が削られ、ただの「スターリン個人崇拜」に変えられた。

『ブレジネフ第三版』（1969）	『ブレジネフ第四版』（1971）
党は、スターリン個人崇拜 <u>とそれが生み出した誤りと歪曲</u> を批判し、……。 ⁸⁾	(1971)、党は、スターリン個人崇拜 <u>(削除)</u> を批判し、……。 ⁹⁾

(3) 大祖国戦争緒戦におけるソ連軍の敗北の原因にたいするスターリンの責任が、2か所にわたり減少している。① まずスターリン自らがスポンサーたる30年代の粛清によって赤軍の将星たちが大量絶滅したが故に、独ソ戦開始時にソ連軍を指導する軍事上の人材を欠き、緒戦の惨憺たる敗北を招いた事実が、『第三版』中では、卒直に承認されていた。¹⁰⁾ 曰く、「赤軍は、経験ある指導幹部が不足していた。ヴェ・カ・ブリュッヘル、ア・イ・イエゴロフ、エム・エヌ・トゥハチェフスキー、イ・ペ・ウボレーヴィッチ、イ・エ・ヤーキルその他の有名な司令官たちは、戦争直前にいわれもなく弾圧されてしまった」。¹¹⁾ ところが、『第四版』は、この節を全面的に削除した。¹²⁾

② また、『第三版』では、スターリンにたいしもっと直接的な責任追求がなされていた。すなわち、フルシチョフ秘密演説（1956）以来ほぼ通説となった、スターリンがドイツの対ソ攻撃の可能性ならびにその開始期の判断を誤り、必要な国防準備を怠った責任である。曰く、「このような状況をもたらした原因の一つは、スターリンが戦争直前における戦略的情勢と、ヒトラー・ドイツのありうべきソ連攻撃の時期について判断をあやまり、このために敵の緒戦の攻撃を撃退する準備を怠ったことにあった」。¹³⁾ 『第四版』は、この部分を全面的に削除した。¹⁴⁾

6) *История КПСС (1969)*, стр. 576. 早川訳, p. 802.

7) *История КПСС (1971)*, стр. 576.

8) *История КПСС (1969)*, стр. 595, 早川訳, p. 825.

9) *История КПСС (1971)*, стр. 593.

10) 木村, 前掲, pp. 35—37参照。

11) *История КПСС (1969)*, стр. 478, 早川訳, p. 682.

12) *История КПСС (1971)*, стр. 478.

13) *История КПСС (1969)*, стр. 478, 早川訳, p. 683.

14) *История КПСС (1971)*, стр. 478.

B ミフルシチョフの格下げ

『第三版』に比べ、スターリン復権のていどがさほどでないのにたいし、ミフルシチョフの〈格下げ〉ならびに批判の進展のほうは、『第四版』においてかなり際立った特色となっている。

(1) 第一に、フルシチョフ政策批判が、さらに一步進められている。たとえば、①フルシチョフ期の農業のたち遅れの事由として、大部分の資源が、『第三版』では「社会主義経済の根本的基盤たる重工業に向けねばならなかった(необходимо быть направлять)」¹⁵⁾ (強調点—木村) からという弁明調から、『第四版』では単に「重工業に向けられた(направлялась)」¹⁶⁾ からという突きはなした表現に変えられた。

② フルシチョフの名とともに名高い処女地開拓が、『第三版』では「大きな、しかも急速な効果をあげた」¹⁷⁾ と記述されていたが、その一文は、『第四版』で削除された。¹⁸⁾

③ フルシチョフ前半期における外交政策上の成功(?)にかんし、『第三版』は、つぎのように書いていた。「1952—58年の時期に、外交政策のすべての分野でおさめられた成功は、ソ連邦が新たなもっとも重要な発展の時期に進出するための前提と可能性をもたらした。」¹⁹⁾ 『第四版』は、この一節を全部カットした。²⁰⁾

(2) 第二に、フルシチョフの共産主義建設のヴィジョンが、ますます貶值的に取り扱われている。①まず、フルシチョフ版共産主義の青写真、達成方法、^{タイムテーブル}時間表を記し、別名「フルシチョフ綱領」とも呼ばれる《ソ連邦共産党綱領》(1961) そのものにたいする言及が、めっきり減少した。たとえば、つぎの一例がしめすように、『第三版』における《党綱領》の言及が『第四版』で削られた。²¹⁾

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
党は、ソ連共産党綱領の実現を保障することをその課題として、イデオロギー活動、勤労者の共産主義教育への関心をつのらせた。 ²²⁾	党は、(削除)イデオロギー活動、勤労者の共産主義教育への関心をつのらせた。 ²³⁾

② また、《党綱領》を採択した第22回党大会(1961)の記述も、きわめて簡略化された。²⁴⁾

③ さらに、《党綱領》の内容、すなわちフルシチョフの楽観的な共産主義への途に関係する記述が、大部分削除されている。つまり、フルシチョフ《党綱領》と関連した形で

15) *История КПСС* (1969), стр. 568, 早川訳, p. 792.

16) *История КПСС* (1971), стр. 568.

17) *История КПСС* (1969), стр. 569, 早川訳, p. 794.

18) *История КПСС* (1971), стр. 569.

19) *История КПСС* (1969), стр. 595, 早川訳, p. 826.

20) *История КПСС* (1971), стр. 593.

21) その他, *История КПСС* (1969), стр. 620, стр. 649, 早川訳, p. 855, pp. 886—7 と *История КПСС* (1971), стр. 623, стр. 636 を, それぞれ比較せよ。

22) *История КПСС* (1969), стр. 638, 早川訳, p. 875.

23) *История КПСС* (1971), стр. 634.

24) たとえば, *История КПСС* (1969), стр. 621—2, 早川訳, pp. 856—8 と *История КПСС* (1971) стр. 623 を比較せよ。

二つのブレジネフ党史

の「共産主義建設」(коммунистическое строительство; построение коммунизма; строительство коммунизма),²⁵⁾ 「共産主義的分配への移行」(переход к коммунистическому распределению),²⁶⁾ 「社会主義の共産主義への進化」(перерастание социализма в коммунизм),²⁷⁾ そして「共産主義的労働」(коммунистический труд)²⁸⁾ の語句が落されている。一例のみをしめす。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
<p>ソ連の経験によって、勤労大衆が社会主義を建設する可能性が立証され、社会主義建設の基本的法則性が明示され、実地に証明された。人類が社会主義へすすむ道がしかれたのである。</p> <p>社会主義が達成した成果を足場として、ソヴェト国民はいまや共産主義への移行を実現しようとしている。ここにこそ、ソヴェト国民の半世紀にわたる建設的活動の主要な成果があり、その偉大な功績がある(強調点—木村)。²⁹⁾</p>	<p>ソ連の経験によって、勤労大衆が社会主義を建設する可能性が立証され、社会主義建設の基本的法則性が明示され、実地に証明された。人類が社会主義へすすむ道がしかれたのである。</p> <p>(削除)</p> <p>ここにこそ、ソヴェト国民の半世紀にわたる建設的活動の主要な成果があり、その偉大な功績がある。³⁰⁾</p>

ところが、ここで注意すべきは、「共産主義建設」等の表現が削除されているのは、フルシチョフ《党綱領》との関連においてのみであり、『第四版』の全ての箇所では削除されているのではないことである。否、『第四版』のハイライトでブレジネフ期の代表的党大会としての第24回党大会の記述部分(=第19章)において、「共産主義建設」の語句は、逆に、頻繁に用いられているのだ。たとえば、「ソ連邦における共産主義建設と同胞諸国における社会主義の建設……」,³¹⁾ 「共産主義建設の問題の一層の精練……」,³²⁾ 「共産主義建設の具体的課題……」,³³⁾ 「共産主義建設にかんする真理……」,³⁴⁾ 等々。つまり、このことから、『第四版』において、「共産主義建設」にかんする語句は、フルシチョフとの関連では削られ、ブレジネフとの関連では、逆に強調されている、といえる。

序ながら、これと全く同一の操作は、「科学技術革命の成果の生産活動への積極的な導入」にかんしてもいえる。つまり、『第三版』における「科学・技術進歩」, 「技術的進歩」, 「科学・技術革命」にかんする記述の多くが『第四版』で削除されているのが目立つ

25) たとえば、*История КПСС (1969)*, стр. 607, 618, 648, 653, 656, 早川訳, p. 841, 853, 886, 892, 894 と *История КПСС (1971)*, стр. 610, 662, 635, 640, 642, をそれぞれ比較せよ。

26) *История КПСС (1969)*, стр. 615, 686, 早川訳, p. 850, 928 と *История КПСС (1971)*, стр. 618, 656, をそれぞれ比較せよ。

27) *История КПСС (1969)*, стр. 615, 早川訳, p. 850 と *История КПСС (1971)*, стр. 618 とを比較せよ。

28) *История КПСС (1969)*, стр. 622, 早川訳, p. 857 と *История КПСС (1971)*, стр. 623 を比較せよ。

29) *История КПСС (1969)*, стр. 686, 早川訳, p. 928.

30) *История КПСС (1971)*, стр. 656.

31) *История КПСС (1971)*, стр. 690.

32) *Там же*, стр. 704.

33) *Там же*, стр. 706.

34) *Там же*.

が、³⁵⁾ それらは殆んどすべてフルシチョフ期の記述部分なのである。すなわち、第20回党大会(1956)、³⁶⁾ 第21回党大会(1959)、³⁷⁾ 1959年6月、1960年7月の党中央委員会総会、³⁸⁾ 第22回党大会(1961)³⁹⁾ が、「技術進歩の問題を審議し」、⁴⁰⁾ 「共産主義建設のなかで科学・技術上の進歩を最大限に促進する方針をうちだした」⁴¹⁾ 等々の記述がカットされている。そして、もちろんブレジネフ期の記述部分において、「科学技術革命」の用語は、実に頻繁に用いられているのである。⁴²⁾ これは、「科学技術革命」がブレジネフ期の専売特許たる印象を与えようとする操作以外のなにものでもないと考えられる。

(3) 最後に、フルシチョフ自身、同権力基盤、同統治スタイルにたいする批判が一段と熾烈となっている。① まず第一は、フルシチョフ更迭事由の変化である。1964年10月の党中央委員会総会における突然のフルシチョフ辞任の公式事由は、誰一人真面目に信用する者がいなかったとはいえ、1964年10月16日付『プラウダ』以来、「老齢と健康の悪化のため」⁴³⁾ とされていた。しかし、今回の『第四版』は、はじめて、この一句を、つぎのように除去した。この変更は、注目に価する。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
総会は、 <u>老令と健康状態悪化の理由から</u> 、中央委第一書記、中央委幹部会員およびソ連邦閣僚会議々員の職務を辞任したいとのエヌ・エヌ・フルシチョフの要請を承認した。 ⁴⁴⁾	総会は、 <u>(削除)</u> 中央委第一書記、中央委幹部会員およびソ連邦閣僚会議々員の職務を辞任したいとのエヌ・エヌ・フルシチョフの要請を承認した。 ⁴⁵⁾

② つぎは、フルシチョフ(?)党中央委員会の貶価である。ソ連共産党中央委員会が、少なくともフルシチョフ時代の一時期フルシチョフの主要権力基盤だったことは、周知の事実である。たとえば、1957年6月、フルシチョフはいったん党中央委幹部会で敗北を喫した後、党中央委員会の開催を求め、一挙に「反党グループ」にたいし劇的な逆転勝利を収めた。この党中央委員会の功績が、『第四版』ではつぎの一か所において削除されている。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
1952—58年の期間に、党 <u>と党中央委員会</u> は、一連の重要な社会的・経済的措置を実施した。 ⁴⁶⁾	1952—58年の期間に、党 <u>(削除)</u> は、一連の重要な社会的・経済的措置を実施した。 ⁴⁷⁾

35) *История КПСС (1969)*, стр. 606, 607, 608, 623, 625, 早川訳, p. 840, 841, 842, 858, 860; *История КПСС (1971)*, стр. 609, 610, 611, 624.

36) *История КПСС (1969)*, стр. 623, 早川訳, p. 858; *История КПСС (1971)*, стр. 624.

37) *История КПСС (1969)*, стр. 606, 607, 623, 早川訳, p. 840, 841, 858; *История КПСС (1971)*, стр. 609, 610, 624.

38) *История КПСС (1969)*, стр. 608, 早川訳, p. 842; *История КПСС (1971)*, стр. 611.

39) *История КПСС (1969)*, стр. 623, 早川訳, p. 858; *История КПСС (1971)*, стр. 624.

40) *История КПСС (1969)*, стр. 608, 早川訳, p. 842; *История КПСС (1971)*, стр. 611.

41) *История КПСС (1969)*, стр. 623, 早川訳, p. 858; *История КПСС (1971)*, стр. 624.

42) たとえば、ブレジネフ第24回党大会に捧げられた新19章において、*История КПСС (1971)*, стр. 694—5, 704.

43) *Правда* (16 октября, 1964), стр. 1.

44) *История КПСС (1969)*, стр. 628, 早川訳, p. 864.

二つのブレジネフ党史

◎ フルシチョフ統治スタイルは、「主観主義」的として、『第三版』でも非難されていた。しかるに、『第四版』は、フルシチョフ主観主義の誤りを、ついに、スターリン主義の悪しき一側面（＝個人崇拜）と対等に置いた。すなわち、新19章の第24回党大会の記述中の一文は、曰く。「大会は、個人崇拜の遺物と同様に（также）主観主義の誤りの克服が、ソ連における政治全般なかんずくイデオロギー状況に有益に反映したことを強調した」⁴⁵⁾（強調点一木村）。

C ミブレジネフの台頭

『第四版』が『第三版』に比べ、現指導部の言及度数を増大していることは明らかである。たとえば、『第三版』でとくに誰の発言とも定かでなかった報告や演説に、一々「エヌ・ベ・ポドゴールヌイが報告した」⁴⁹⁾「ア・エヌ・コスイギンが報告した」⁵⁰⁾「エリ・イ・ブレジネフが、この問題の報告をおこなった」⁵¹⁾と付加・明記している。といっても、全体としては、ポドゴールヌイにたいする言及は6か所で『第三版』に比べわずか1箇所増えただけで、コスイギンは9か所で『第三版』とまったく変わらない。

つまり変わったのは、ブレジネフである。ブレジネフ言及回数は、『第三版』の19（引用3）から、今回の『第四版』において一躍27（引用6）に増大している。これは、『第四版』に新しい部分の歴史、とくにレーニン生誕百周年記念（1970）、第24回党大会（1971）が付加された当然の結果というだけでは済まされない躍進である。なぜなら、この二つの行事にかんする新しい記述中の言及において、同僚コスイギン—2回⁵²⁾ポドゴールヌイ—1回⁵³⁾に対し、ブレジネフ—10回⁵⁴⁾と、ブレジネフは他を断然圧しているからである。

ブレジネフ同様、ブレジネフが主要報告をした第24回党大会も、その他の党大会に比べ格段のフットライトを浴びた。すなわち、第24回党大会は、既述のごとく（57ページ）、独立の一章（第19章）を与えられるとともに、「党自身、ソ連社会の生活ならびに世界の発展史において、重要な歴史的転換点（важный исторический рубеж）を劃し」⁵⁵⁾（強調点一木村）、第24回党大会で「採択された経済政策、承認された新五カ年計画指令は、ソ連の発展において質的に新しい時代（качественно новый период）を開く」⁵⁶⁾（強調点一木村）と讃美された。『第四版』は、このようにブレジネフ期のハイライトたる第24回党大会を「重大な歴史的転換点」、「質的に新しい時代」という修飾句を与える他方、フルシチョフ期の絶頂たる第22回党大会からは、類似の修飾句を剥奪したのである。すなわち、

45) *История КПСС (1971)*, стр. 627.

46) *История КПСС (1969)*, стр. 594, 早川訳, p. 825.

47) *История КПСС (1971)*, стр. 592.

48) *Там же*, стр. 694.

49) *История КПСС (1969)*, стр. 629, 早川訳, p. 866; *История КПСС (1971)*, стр. 628.

50) *История КПСС (1969)*, стр. 633, 早川訳, p. 870; *История КПСС (1971)*, стр. 631.

51) *История КПСС (1969)*, стр. 630, 早川訳, p. 867; *История КПСС (1971)*, стр. 629.

52) *История КПСС (1971)*, стр. 683, 706.

53) *Там же*, стр. 706

54) *Там же*, стр. 663 (2回), 664 (2回), 683, 690, 692, 705, 706 (2回).

55) *Там же*, стр. 707.

56) *Там же*, стр. 700.

『第三版』中の記述「第22回党大会は、ソ連邦の発展の新しい重要時代（новый важный период）を劃した」⁵⁷⁾（強調点—木村）は、『第四版』で全文削除された。

II ブレジネフの内外路線

つぎに、『第四版』の『第三版』との相違を比較することによって、ブレジネフ路線の強調点の在りかならびに推移を探ることが可能である。国内面と国外面に分けて検討しよう。

A 国内面

国内面にかんしては、つぎの三点が、『第四版』の『第三版』からの主な相違点である。

(1) 第一に、ブレジネフによって提唱されたコルホーズ、ソフホーズなる社会主義集団農業の二形態のいわば共存共栄論が歯ぎれの悪いあいまいなものになった。ブレジネフは、ブレジネフ農政の基礎をおいたといわれる1965年3月の党中央委員会総会で、それぞれの特殊性をもつコルホーズ（協同組合的所有）とソフホーズ（国家的所有）の二本立を積極的に肯定し、両形態がともに全人民的所有へと徐々に接近してゆくという構想を打出した。⁵⁸⁾ これは、従来ソ連に一貫して支配的だった考え方、すなわちコルホーズをできるだけ早くソフホーズに統合一本化すべきとの考え方の大胆な修正であった。そして、『第三版』党史は、この農業総会のラインを忠実に反映し、つぎのように記していた。

「農業の振興にとってとくに重要なことは、農村の社会、経済関係を正しく発展させること、また、二つの型の共同経営、すなわち、国家的所有と協同組合・コルホーズ的所有という二つの形態の社会主義的所有を基盤とするコルホーズとソフホーズを上手にむすびつけることである。コルホーズとソフホーズの改組という傾向がこれまでであったが、それは、コルホーズ体制の活力と、コルホーズが発展する大きな可能性とを過小評価したからこそはじめて起った傾向であった。農村における二つの形態の所有制が合して単一の共産主義的所有制となるのは、コルホーズ・協同組合的所有制を縮小するやり方ではなく、逆にこれらを強化し、徐々に全人民的所有に近づけてゆくというやり方でおこなわれるであろう。そこで、党組織と国家機関のやるべきことは、二つの形態の共同経営をできるだけ発展させ繁栄させるように仕むけてやることである」⁵⁹⁾

以上の記述は、『第四版』において全面的に削除された。⁶⁰⁾ 『第四版』は、他方において『第三版』におけるコルホーズ強調の一文、すなわち、「党綱領は、レーニンの協同組合計画と対比しながら、コルホーズの役割を強調している」⁶¹⁾ も削除した。⁶²⁾ したがって、党史から判断するかぎり、現ブレジネフ政権のコルホーズにたいする態度はかなり変化したと想定されうる。

(2) 第二に、コスイギンによって主宰され1965年秋から開始された「経済改革」にた

57) *История КПСС (1969)*, стр. 621, 早川訳, p. 856.

58) *Пленум ЦК КПСС (24–26 марта, 1965 г.): Стенографический отчет.* (Москва: Политиздат, 1965), стр. 27.

59) *История КПСС (1969)*, стр. 632, 早川訳, p. 868—9.

60) *История КПСС (1971)*, стр. 630.

61) *История КПСС (1969)*, стр. 614, 早川訳, p. 849.

62) *История КПСС (1971)*, стр. 617.

二つのブレジネフ党史

いする熱意も、『第四版』では一層稀薄化したように感じられる。たとえば、『第四版』では、『第三版』に存在した「経済改革」にかんする記述が少からず削除された⁶³⁾。うえ、「党とソビエト国家は、国家集権的計画の指導的役割を市場的調整に従属せしめようとする凡ゆる間違った考え方を拒否する」⁶⁴⁾と、「経済改革」が資本主義的なマーケット・メカニズムと無縁たることを明確にしめす一文が挿入された。

(3) 第三は、「科学技術革命」にたいする態度である。ブレジネフ政権が「科学技術革命の成果の生産活動への積極的な導入」を自己の専売特許としていることは、既に「フルシチョフ」の項目で述べた(61-62 ページ参照)。ところで、そのブレジネフ政権の表看板ともいべき科学技術革命の利用の内容や方法にかんし『第四版』で新しく表明されたものたるや、「社会主義」政権としてなんら新味のない旧態依然、きわめて虫の良いものである。なぜならば、その骨子は、依然として、一方において、とくに西側先進資本主義諸国で開発・推進されつつある技術革新の成果を積極的に研究・導入することを奨励するとともに、他方において科学技術と社会主義体制との間の有機的な調和にたいするきわめて楽観的ナイーブな信仰を堅持するところにあるからである。すなわち、『第四版』の新19章は、「とくに科学・技術革命の影響下に発生しつつある資本主義経済における新しいプロセスの研究が、理論的作業における重要な位置を占める」⁶⁵⁾と記す他方において、つぎのように述べた。「大会(第24回ソ連共産党大会—木村)は、党とソビエト人民のまえに歴史的意義ある課題を提示した。それは、科学・技術革命の成果を社会主義経済体制の長所と有機的に結びつけ、科学と生産との結合にかんし社会主義特有の形態をあらゆる手段を構じて発展させることである」(強調点—木村)と。⁶⁶⁾

B 対 外 面

国外面にかんしては、つぎの三点が、『第四版』の『第三版』に比べての主な相違点である。

(1) 第一は、ベトナム戦争である。すなわち、一か所ではあるが、『第三版』に存在した、ソ連による「北ベトナムの対アメリカ帝国主義との斗争にたいする援助」の一句が、つぎのごとく削られている。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
<p>現在、ソ連共産党の努力は、社会主義諸国共同体の戦闘力をたかめること、<u>アメリカ帝国主義とたたかっている英雄的ヴェトナム人民をできるかぎり援助すること、</u>国際帝国主義とたたかいながらその国家的独立をまもっている新興の発展途上国と、植民地主義の抑圧からの解放のためにた</p>	<p>世界社会主義体制の形成とともに、ソ連共産党の努力は、社会主義諸国共同体の戦闘力をたかめること、 (削 除) 国際帝国主義とたたかいながらその国家的独立をまもっている新興の発展途上国と、植民地主義の抑圧からの解放のためにた</p>

63) たとえば、*История КПСС (1969)*, стр. 678—679, 早川訳, 920—1 の前後。

64) *История КПСС (1971)*, стр. 699.

65) *Там же* стр. 704.

66) *Там же*.

たかっている諸民族を支援することに向けられている。⁶⁷⁾

たかっている諸民族を支援することに向けられている。⁶⁸⁾

(2) 第二は、対西独関係である。周知のごとく、ソ連は、1969年秋成立した西独のブランド政権との間に、1970年8月武力行使条約を調印し、現在の国境凍結に成功したが、かように『第三版』刊行(1969)以来ソ連—西独関係に生じた変化が、『第四版』に忠実に反映している。つまり、『第三版』に存在していた、つぎの3か所、すなわち東西ドイツ統一についての見解(1か所)や国境変更をたくらむ「西ドイツ報復主義者」にたいする攻撃の部分(2か所)は、『第四版』で削除された。⁶⁹⁾

—「ソ連邦共産党とソヴェト政府は、ドイツ民主共和国政府もくり返し提案しているように、ドイツの民族的統一の回復は、外部からの干渉なしに、ドイツ民主共和国とドイツ連邦共和国という二つのドイツ国家間の直接交渉と自発的協定を通じて、ドイツ国民自身の手によっておこなわれなければならないとみなしている」。⁷⁰⁾

—「ヨーロッパで諸国民の平和と安全にたいする脅威となっているのは、アメリカ帝国主義者に支援されたドイツ連邦共和国の報復主義的政策である。ドイツ連邦共和国は、現行の国境の変更をたくらんでいるヨーロッパでただひとつの国家である。西ドイツの支配層はもう一つのドイツ国家、すなわち労働者と農民の国家であるドイツ民主共和国の承認を拒否している。西ドイツの報復主義者はドイツ民主共和国や他の社会主義国にたいする破壊活動をつづけ、社会主義陣営に分裂をもちこもうとたくらみ、核兵器をもとうと狂奔している」。⁷¹⁾

—「声明(=1967年4月、チェコスロヴァキアのカルロビ・バリでひらかれたヨーロッパ共産党・労働者党会議—木村)は、つぎのようにのべている。報復主義的、軍国主義的勢力にひきいられたドイツ連邦共和国はヨーロッパの世論に深刻な不安を引き起こしている。ボン政府はアメリカの世界戦略のヨーロッパにおける基本的足場となった。帝国主義者は、ドイツ連邦共和国の再軍備を実現し、その不法な要求を支持し、反共の前進堡壘の役割を振り当てている」。⁷²⁾

(3) しかし、なんといっても対外面において、『第四版』が『第三版』と最大の対照をしめしているのは、対「中国」関係である。

① まず、1949年の中国革命が格下げされている。すなわち、「世界の解放史上」第一の出来事は、『第三版』、『第四版』において共に、いうまでもなくロシア十月革命とされているが、第二の出来事を、『第三版』が「中国革命」としていたのが、『第四版』は、次にしめすように、「世界社会主義体制の成立」と変更した。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
中国人民の勝利は、戦後の時期のもっとも重要な出来事である。その意義と人類の運命にた	世界社会主義体制の成立は、人民の偉大な歴史的成果であった。その意義と人類の運命にた

67) *История КПСС (1969)*, стр. 692, 早川訳, p. 934.

68) *История КПСС (1971)*, стр. 659.

69) しかし、「西ドイツ帝国主義」、「西独報復主義者」にたいする攻撃が『第四版』でも、依然残されている箇所(2か所)もある。*История КПСС (1969)*, стр. 598, 650, 早川訳, p. 829, 888; *История КПСС (1971)*, стр. 596, 637.

70) *История КПСС (1969)*, стр. 598, 早川訳, p. 830; *История КПСС (1971)*, стр. 596.

71) *История КПСС (1969)*, стр. 666, 早川訳, p. 907; *История КПСС (1971)*, стр. 596—7.

72) *История КПСС (1969)*, стр. 667, 早川訳, p. 908; *История КПСС (1971)*, стр. 597.

二つのブレジネフ党史

いする影響からみて、中国革命 は世界の解放運動史上、十月革命につぐ第二の地位を占めている。⁷³⁾

いする影響からみて、世界社会主義体制の成立 は世界の解放運動史上、十月革命につぐ第二の地位を占めている。⁷⁴⁾

①) しかし、この1例を別にすれば、『第三版』における痛烈な中国非難のトーンが随分和らげられているのが『第四版』の一大特色である。1969年末出版された『第三版』の草稿は、恐らく1969年春すなわちウスリー河上ダマンスキー島における中ソ警備隊衝突前に印刷に付されたと想定される。そして、この現実には火を吹くにいたった中ソ対立の深刻性に驚いたソ連による事態改善への努力が、1971年秋出版の『第四版』において、中国非難のトーンの軟化となって現れたと考えられる。では、『第四版』において、ソ連による旧来の中国攻撃は、いかに、またどのていど緩和されているのか？

まず一例をしめそう。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
中国共産党指導部内の、毛沢東とその一派は、 <u>時</u> が経つにしたがって、ますますソ連共産党にたいする非難を強化し、反ソ・キャンペーンを展開し、中国共産党と中国人民の心に大国主義的排外感情を植えつけ、はげしい民族主義的感情をたきつけた。 ⁷⁵⁾	中国では、 <u>時</u> が経つにしたがって、ますますソ連共産党にたいする非難を強化し、反ソ・キャンペーンを展開し、党と人民の心に民族主義的感情を植えつけ、たきつけた。 ⁷⁶⁾

②) 以上の対照において、『第三版』の中国非難が『第四版』で全体として緩和されたトーンに変っていることが、容易に気づかれるであろう。しかし、なかでも、最大の変更点は、ブレジネフ・ソ連の攻撃対象が、「中国共産党指導部内の、毛沢東とその一派」という具体的に明示された人的グループからたんに「中国」という漠然とした存在に変えられている点である。このような修正の例は、随所に見受けられる。たとえば、つぎの一例では、中国批判の1ページ余の記述が約7割の量に減少されたうえに、「中国指導者」→「北京」、「北京指導者」→「中国」、「中国の指導者」→「中国の宣伝」、と変えられ、「毛沢東一派」の語句が削除されている。

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
これとならんで、ソ連共産党にとってますます大きな不安の種となっていたのは、 <u>中国指導者</u> の分裂行動が社会主義陣営内に引き起した困難であった。 <u>北京の指導者</u> は、大部分の社会主義国との経済関係を最低限まで引き下げ、これらの国との政治協力を拒否した。社会主義諸国の統一戦線を破壊しようとして、 <u>中国の指導者</u> は、大部分の社会主義のマルクス・レーニン主義政党をさかんに非難し、こ	これとならんで、ソ連共産党にとってますます大きな不安の種となっていたのは、 <u>北京</u> の新しい対外方針が社会主義陣営内に引き起した困難であった。 <u>中国</u> は、大部分の社会主義国との経済関係を引き下げ、これらの国との政治協力を拒否した。同時に、 <u>中国の宣伝</u> は、マルクス・レーニン主義政党、とくにソ連共産党ならびにソ連人民をさかんに非難した。 <u>中国</u> においては、反ソキャンペーンをますます広範

73) *История КПСС (1969)*, стр. 529—30, 早川訳, p. 746.

74) *История КПСС (1971)*, стр. 555.

75) *История КПСС (1969)*, стр. 646, 早川訳, p. 884.

76) *История КПСС (1971)*, стр. 670.

これらの国にたいする中傷的キャンペーンを展開した。かれらは、とくに反ソ中傷に懸命となり、ソ連共産党とソ連国民にひどい侮辱をあげ、中ソ関係を紛糾させた。ソ連共産党とソビエト政府は、中国指導者の中傷的な作り話には断固たる反撃を加えながらも自制してきた。

中国共産党指導部は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義から完全に逸脱し、民族主義と大国主義的排外主義の立場へうつった。かれらの指導する大国主義的反ソ政策、国際共産主義運動における分裂主義的行動は、…客観的には帝国主義をたすけている。ソ連共産党とソビエト国民は、毛沢東一派と、中国共産党大衆、中国人民を混同してはいない。……

中国指導部の分裂行動は、社会主義諸国共同体に大きな害毒をもたらし、社会主義諸国を離間させることとなり、帝国主義との闘争における社会主義諸国の集団的努力をよわめていった。中国指導部のソ連とその他の社会主義国に敵対する新外交路線を帝国主義者が喜ばないはずはなかった。⁷⁷⁾

に展開した。このような政策は、社会主義の利益や社会主義国家の協力に損傷を惹きおこした。

第23回党大会の指令にしたがいつつ、ソ連共産党と同中央委員会は、北京の宣伝の中傷的な作り話や敵意にみちた攻撃には断固たる反撃を加えながらも、自制してきた。ソビエト共産主義者、全ソビエト人民の気持を反映して、ソ連共産党中央委員会は、1966年12月総会で、ソ連共産党が今後、中国共産主義者、中国人民との友情を強化する方針をとる旨宣言した。同時に、総会は、マルクス・レーニン主義擁護の闘いの強化、反レーニン主義的見解、大国主義的ショービニズムと民族主義の断固たる暴露を呼びかけた。⁷⁸⁾

このように、「毛沢東グループ」や「中国共産党指導部」を「北京」ないし「中国」とたんに置きかえるだけでなく、『第四版』ではその「分裂主義的活動」にたいする『第三版』の非難・攻撃のパラグラフ全文を完全に削除してしまったケースもある。⁷⁹⁾

④ もう一点注意すべき変更は、つぎの例がしめすように、中国で「大国主義的、反ソ的、分裂主義的活動をおこなっている」主体が、『第三版』の「中国共産党指導部」(руководство КПК)ないし「中国指導部」(китайское руководство)から、『第四版』では「北京指導者」(пекинские лидеры)に変えられていることである。⁸⁰⁾

『ブレジネフ第三版』(1969)	『ブレジネフ第四版』(1971)
<p>帝国主義は、なによりもまず <u>中国共産党指導部</u> の大国主義的、反ソ的政策と分裂主義的活動によって引き起こされた共産主義運動内部の意見の対立を、自分の利益のためにますます利用しようとしはじめた。科学的共産主義を攻撃し、共産主義運動の原則的方針を修正し、現代のすべての基本的諸問題についてその特殊な方針を共産主義運動の原則的方針に対置することを手はじめとして <u>中国共産党指導部</u> は公然たる分裂工作に訴え、いろいろな国に自派の破壊</p>	<p>帝国主義は、なによりもまず <u>北京指導者たち</u> の大国主義的、反ソ的政策と分裂主義的活動によって引き起こされた共産主義運動内部の意見の対立を、自分の利益のためにますます利用しようとしはじめた。科学的共産主義を攻撃し、共産主義運動の原則的方針を修正し、現代のすべての基本的諸問題についてその特殊な方針を共産主義運動の原則的方針に対置することを手はじめとして、<u>北京指導者たち</u> は公然たる分裂工作に訴え、いろいろな国に自派の破壊</p>

77) *История КПСС (1969)*, стр. 668—9, 早川訳, p. 910—11.

78) *История КПСС (1971)*, стр. 603—4.

79) *История КПСС (1969)*, стр. 664, 707, 早川訳, p. 905, 951; *История КПСС (1971)*, стр. 599, 682.

80) 本文中引用以外の箇所として、*История КПСС (1969)*, стр. 700, 早川訳, p. 944—5; *История КПСС (1971)*, стр. 676.

二つのブレジネフ党史

グループをつくりはじめた。中国指導者は、まず社会主義諸国との結びつきをしいによりわめてから、社会主義諸国にたいする敵対行動に移った。⁸¹⁾

グループをつくりはじめた。北京指導者は、まず社会主義諸国との結びつきをしいによりわめてから、社会主義諸国にたいする敵対行動に移った。⁸²⁾

この変更は、『第四版』準備ないし刊行時のブレジネフ政権が、「中国指導部」ないし「中国共産党指導部」全体と「北京」における権力掌握グループとを峻別し、それが非難・弾劾するのは後者であって必ずしも前者ではないことを明確にせんとする意志表示だと受けとられる。

結 論

ブレジネフ期の二つの党史は、形式面では（著者、章数、ページ数）は全く同一の体裁を保っている。内容上は、第24回党大会の記述の有無が、両者の相違の最大のものであるが、第24回党大会以外の部分においても、それぞれわずかとはいえ、数々の差異がみられる。そのうち最も顕著なものは、『第四版』におけるブレジネフの役割の強調と対中国批判の軟化といえる。最後に重要なことは、『第四版』が決して改訂版党史の最後ではないことである。つまり、今後もしブレジネフ政権が存続すればとうぜん『ブレジネフ第五版』もしブレジネフ政権が崩壊すれば代りの新政権の手による『第五版』が必ずや刊行されるであろう。いずれの場合にせよ、『第五版』刊行の時期は、恐らく第25回党大会開催（現在1976年に予定）後の時点とほぼ推定される。要するに、『ブレジネフ第四版』は、1969—71年時におけるソ連邦の政治的雰囲気を反映した歴史的生成物であり、新しい政治的気流の展開とともにとうぜん改訂される運命の過渡的存在である。これは、その前身たるすべての党史が結局辿った運命で、ブレジネフ『第四版』といえども免れるわけにはいかないのである。

（1972. 9. 30 脱稿）

〔付記〕 本稿は、昭和47年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

81) *История КПСС (1969)*, стр. 695, 早川訳, p. 936.

82) *История КПСС (1971)*, стр. 671.